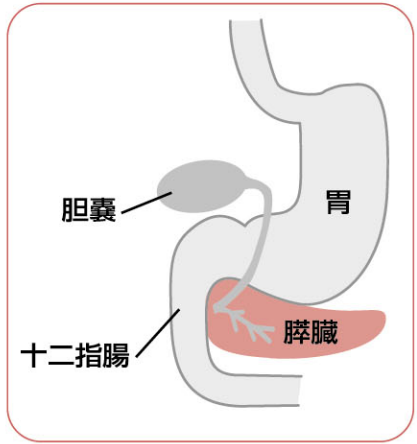
シリーズ　気になる「癌と検査」のこと　専門医が教えます ⑧

膵癌の検査について

日本臨床検査専門医会
池田 均



■ 膵癌にはどのような特徴があるのでしょうか？

膵臓は、血液中の糖分を調節するインスリンや食べ物を消化吸収するための酵素を作って、それぞれ血液中や腸管に分泌するという重要な役割を担っている臓器です。ここに発生する膵癌は一般に早期の発見が難しく、また、手術などで切除しても再発する確率が高いため、治療も難しい難治癌の代表とされています。

■ なぜ膵癌の早期発見が難しいのでしょうか？

まず、膵臓はお腹にある臓器の中では最も深い場所にあるため、検査自体が難しいことが挙げられます。食道や胃、大腸のように内視鏡で癌を疑う部位を直接観察することはできません。膵癌は、胃癌や肝臓癌と同じく、形を作る「固形癌」と呼ばれるものの一つですが、その中では明らかな形を作らずに、正常な部位との境界が曖昧なままに広がる傾向があります。このため、超音波検査やCT、MRIを用いても早期発見が難しいのが実状です。

■ 膵癌が難治癌とされる原因は？

早期発見が難しく、診断された時点で、すでに拡がっていて手術によっても切除しきれないことが多いことが大きな原因です。また、手術で取りきれたと判断されても、早い時期に再発してしまうことが多いのも事実です。正常な部位との境界が曖昧なままに広がる膵癌は、手術によっても完全に取りきるのが難しいことが理由の一つと考えられています。

■ 膵癌の治療方法にはどのようなものがありますか？

まず、手術が挙げられますが、病気の範囲が限定的で手術によって取りきれることが実施の条件となります。また、患者さんの負担が大きいため、これに耐えられる体力が必要です。手術を選べない方の場合は抗癌剤による治療が選択されます。抗癌剤については、最近多くの新しい薬が導入され、完全に治すことは難しいものの、病気の勢いを従来に比べて長い期間にわたり抑えることができるようになりました。

■ 膵癌の腫瘍マーカーはどのように活用されていますか？

膵癌の腫瘍マーカー（主として腫瘍が作って血液中に出てくる物質）には数種類あって、早期の発見に威力を発揮することは難しいものの、診断を確実にする際の判断材料として有用です。すなわち、超音波検査やCTで膵癌を疑う病変が見つかった場合に、血液中に膵癌の腫瘍マーカーが増えていれば、より確実に膵癌と診断されるといった具合です。また、最近では抗癌剤による治療効果の判定に広く用いられるようになりました。膵癌が正常な部位との境界が曖昧なままに広がる傾向があることはご説明しましたが、このため病変の範囲を超音波検査やCTによって正確に把握することが難しく、その大きさの変化によって抗癌剤の効果を判断することは容易ではありません。ところが、血液中の腫瘍マーカーが減ってくれば抗癌剤が効果を発揮したと採血のみで簡便に知ることができます。使用できる抗癌剤の種類が増えてくれば、早めにその効果を判定して、より良いお薬を選択することが重要となりますので、治療効果判定における腫瘍マーカーの有用性は今後さらに大きなものになると想定されます。